

映画の宿命 小林 勝

活字文化に対し映像文化ということが近頃よくひとの口に上るようになった。この二つがマスコミの二大メディアだというわけなのである。

活字文化のことはしばらくおき、映像文化と言えは主として映画、テレビ等がその中心であるが、今はテレビについては専門外として筆を避けたい。

それよりも、いったい文化とは何か。或は文明と言ってもいい。これについて一応私がどう理解しているかを申し述べたい。人間に欲望がある限り、或は希望という美しい言い方をしてもいいが、文化は日進月歩の勢いで進んでゆく。これはいいことだが、進むだけで決して遅くことが出来ないのである。バカな話だけれども、一度進ん

でしまうと元へ戻り得ないのである。文明論者は突如発生した公害現象に狼狽して何とか辻褄を合せようとしている。笑止の限りであるが、私は今文明批判をしているのではないから、これ以上は言わないが、こういう感覚を下敷きにして映画の宿命について考えてみたいと思うのである。

映画がはじめて生れたのは発明家の力による。ここからしてすでに映画は他の芸術と違う運命を背負っている。絵画も音楽も建築も誰が発明したかわかっていないが、映画はちゃんとその姓名も日付けもわかっているのである。その点は活字文化も同じだが、ともかくもその発明を芸術家が芸術にしたのである。もっとも芸術でない芸術のさばっているのは、なにも映画に限ら

ないが、芸術非芸術の詮索に話題を散らすと、ややこしくなって主題から遠のくことになるから、作家或は作品という軽い意味にしておきたい。

とにかく映画が一つの作品として完成するまでには、幾多の作家の努力が積み重ねられたわけだが、その映画作家に晴天の霹靂の如く、或る日突然映画に音が入って来た。これは作家の意志とは無関係に、資本家が映画を変形したのである。その理由は簡単、利潤追求のためであって、決して芸術的欲求ではなかった。

その次に、映画に色彩が入って来た。これも同じ理由である。芸術家は資本に尻を叩かれて、映画をまた新しい形に生かす努力を重ねざるを得なかった。

それから映画の立体化。これは資本家のミスで、あわてて引込めたが、やがてテレビが拾頭して来て映画の影が薄くなると、今度はワイド・スクリーンという手を考え出した。芸術家はまた新しい努力を強いられた。

こんなことを繰返してゆくと、映画はど

ここまで変身し、作家の呼吸はどこまで続けられることが出来るか、それとも呼吸の根が止ってしまうのか、誰にもそれはわからないだろう。中には資本の横暴にさざやかなレジスタンスを示して、無声映画や白黒映画や標準型映画（これはたいして資本にとつて痛痒を感じないためか、今でも時々出現するが）を作る作家もいないではないが、大河の流れには抗しようもなく、忽ち消滅してゆく。

これが即ち映画の現実だが、これを裏返しに見ると、また面白い見かたも出来る。映画は他の芸術とちがって、カメラ・レンズ・フィルムなどという科学的機材によって作られる。すべて機材は文化とともに進むから、機材が進歩すればするほどそれに比例して、映画の表現能力が著しく拡大される。音も色もない古くさいカメラしかなかった時代には、モンタージュが芸術表現のギリギリだったのに、美しい音色、精巧なレンズや機械が出来る、現在のようにむしろモンタージュを否定するような、全く新しい縦横無尽な幅広い表現能力や、

それにふさわしい映画理論までも持つに至った。

ダヴィンチなどは自分で絵の具を工夫して自由に芸術作品を作ったが、映画の首の根は作家でなく、資本家が押えている。映画は美術と違って、作家が個人でなく複数であるという点で多少のニュアンスが違うということもあるが、それにしても商業主義が映画の内容形式ばかりでなく、その理論まで支配していることに変わりはない。このことは必らずしも資本主義国の現象ばかりではない。共産圏諸国においても、利潤の代りにイデオロギーが映画を支配するものである。つまり映画芸術家は自己の絶対的自由を持ち得ない運命におかれている。資本家から離れて自立した独立プロだって、興行並びに収入（つまり商業主義）の首枷から解放されることはできない。

ここでもおもしろいことは、少々おそまきだが、その商業主義に敢然として立向かうという思想が現われたということである。もちろんその先駆（例えば前衛映画）は無くもなかったが、いつか大河の流れに没し

てしまった。そういう過去の歴史的事実はあるにせよ、今度の反商業主義運動は、いささか様子が違う。まずそのスタイルがヒッピー型で出発していることで、目的はあくまで絶対自由製作であり、過去の映画概念を全然無視している若い人たちの怒りの爆発である、今の所色々なスタイルがあるが、その一例をあげればアングラ映画運動などである。その理論も即非の論理に近い、難解なものであって、商業主義が頑として拒否して来た即興性がこの連中の象徴的旗印である。これは今後の映像の在り方に確かに希望（それとも失望）を持たせるもので、映画文化の未来学はこれからどんな形にまとまって行くであろうか、極めて興味の深いところである。それは今のところ渾沌としたものであるが、渾沌そのものが、もしかしたら映像の主体となるかも知れないのである。

ともかくも映画は変る。そして映画は残る。これだけは間違いはない。